

引された。

同大には約六五〇人の中国人が在籍するが、昨年九月に入学した中国人留學生の多くはフランス語が全く話せず、仏国民教育省が、中国国内で仏語の能力証明書が偽造された可能性があるとの警告を全仏の大学学長に発していた。(二〇〇九年四月一六日付「フランス」金に物言わせ：中国人留學生、国立大学の修了証三五万円を取引か 数百人が不正の疑い)

これが中国ガンの遠隔転移の留學生版だが、こうして世界中の學術の殿堂が中国人に蝕まれ、破壊されてきた。そして、今も破壊され続けているのだ。

### 3 中国人も中国ガンに苦しんでいる

#### ガン細胞に食い散らされた国土

万里の長城は砂漠化の記念碑

果てしない欲望の終着点は死である。食欲の塊であるガン細胞は際限なく膨張し続け、その凶体を維持するため、まわりから栄養分を奪い取り、他の細胞を死滅させる。略奪せずには生きていけないガン細胞だから、生体全体の均衡を崩してしまい、最終的にはガン細胞も死滅する。

食欲と略奪の本能から抜け出せないのがガン細胞である。

死に突き進む本能を持つ中国ガンは、母なる大地を回復不能なまでに破壊してしまっている。こ

こ三〇年間、そのスピードがさらに加速している。今や地球規模の破滅をもたらすところまできている。

中国の国土は九六〇万平方キロで、面積はアメリカとほぼ同じだが、居住可能な面積は一〇%に過ぎず、アメリカの七五%に遠く及ばない。そのうえ、アメリカの四倍以上もの人口だから、中国人の生活空間がいかに窮屈であるかがわかる。

住居可能面積や耕地面積が少ないため、中国人が考える手段とは、森林から土地を奪うことである。しかし、森林を切り倒して広大な耕地面積を開拓すれば、深刻な土壌流出が発生し、砂漠化を加速させる。そのため、中国人は別の森林に手を出し、乱伐を繰り返す。

中国の国家林業局の発表では、国土の一八・二%にあたる一七四万平方キロがすでに砂漠化し、毎年、三四三六平方キロの国土が砂漠化している。別のデータによると、すでに国土の半分ぐらいは砂漠化している。

中国の森林伐採による砂漠化は今に始まったものではない。中国の人為的な山河の崩壊は数千年前から始まった。たとえば、秦と漢の時代から建造と修繕を繰り返してきた万里の長城のため、大量の鉄器が必要となった。鉄器生産に必要な木炭を作るために大量の木が伐採され、北中国の砂漠化が進んだ一因となった。つまり、万里の長城は中国の砂漠化の記念碑なのだ。

人口が数千万しかなかった古代中国なら、自然の回復力が中国人の破壊力を上回った。しかし、

今の一三億五〇〇〇万人の人口を有する巨大中国ガンを前にして、大自然も降参するしかないのだ。

### 「人定勝天」という中国人の自然観

中国人は日本人と違う自然観を抱いている。日本人は自分も自然の一部と考え、自然に親しみながら自然とともに生きている。自然に敬意を払っている。だが中国人は、自然と人間を別個の存在と考えている。中国人にとって自然とは、人間に利用されるべき存在以外のなものでもない。

中国人が好む考え方を端的に表す「人定勝天」(人定まりて天に勝つ)という言葉がある。人間は必ず天に打ち勝つという意味で、中国人の哲学ともなっている言葉だ。

この言葉が中国人の自然観を象徴している。中国ではこの言葉は「人間は努力をすれば、天ほどの困難にさえ打ち勝つことができる」という意味に解し、励ましの言葉として使われているからさらに恐ろしい。

中国人の哲学は、自然を馴らして奴隷にすることが望ましいが、それができない場合は敵視して打ち負かせ、というものだ。そういう哲学を持つ民族だから、自然を破壊しない方が逆に不思議なのだ。

自然を破壊しなければ生きていけない中国人

中国国家林業局が二〇〇八年に発表した統計によると、砂漠化の主な人的要因は以下の通りである。「薪をとるため」三二・四％、「耕地獲得」二二・二％、「住宅用造成」一五・一％、「乱伐採」一三・四％、「鉱物の乱採掘」一〇・七％、「過度な放牧」八・二％。

しかし、中国政府が発表したものは例外なく政治的意図が隠されている。都合のいいデータならそのまま発表するが、都合の悪いデータは隠すか、加工してから発表する。中国にとって統計とは、真実を伝えるものではなく、宣伝道具の一つに過ぎない。

この統計にも、当然ながら中国的打算がある。それは何かと言えば、中国の砂漠化は貪欲的な乱開発によるものではなく、薪や耕地など、農民が生きていくための結果だという世論操作の意図が隠されている。

しかし、この意図はある意味、砂漠化の真実を衝いている。経済発展による乱開発が砂漠化を加速させていることはほぼ間違いないが、見落とされやすいのは、中国人がそこにいるだけで砂漠化が進むという事実である。ここで日本人との違いが出てくる。中国人は木を伐ることはあっても、植えることはしない。木を植えて育つまでは何十年もかかり、自分では享受できないからだ。森がなくなったら、中国人は躊躇なく別の森を伐り倒す。

砂漠化の原因はただ一つ、それは中国人の利己主義である。中国人がそこにいる限り、砂漠化は

止まらない。

#### 煉獄に変わり果てた桃源郷

平野部は乱伐によって砂漠化し、森の消えた山間部は地表の草も失って石ころだけの禿山はげやまになる。これを「石漠化現象」という。石漠化は蒼々とした山々を醜い禿山に変えるだけでなく、山を土石流の発生源にし、恐ろしい凶器に変身させる。

二〇一〇年八月八日、甘粛省甘南チベット自治州の舟曲県が巨大な土石流に襲われ、八千名以上のチベット人村民が犠牲になった。中国地質環境観測院の地質災害調査室責任者の周平根氏は、この災害はダムや高速道路や鉄道のインフラ整備によるものだと指摘している。

インフラ整備が「桃源郷」と呼ばれた甘南を煉獄れんごくに変えてしまったのだ。いったい誰のための、何のためのインフラ整備なのだろう。

ちなみに、甘南と同じような土石流が発生しやすい地質災害リスク地域は、中国全土で二〇万カ所にのぼり、そのうち巨大な地質災害が発生するリスク地域は一万六千カ所もある。

#### 毒だらけの大地

では、砂漠化や石漠化を免れる場所なら安泰なのかと言えば、そうではない。それ以外の土地も

毒されているのだ。

中国では有毒化学物質および重金属の汚染が工業から農業へ、都市から農村へ、地表から地下へ、上流から下流へ、土壌・水から食品へと広がっている。

現在、最も汚染が広がっているのはカドミウム、水銀、鉛、ヒ素による汚染である。中国で年間生産された二億トンの米の一角は、カドミウムが基準値を超えている。特に湖南、江西、雲南、広西等省の一部地区の酸性土壌は、広範囲にわたってカドミウムに汚染され、収穫した米の六割超はカドミウム含有量が基準値を超えている。

こうした重金属で汚染された土壌は、全国耕地面積の六分の一（約二千万ヘクタール）に達していると言われる。

中国に「汚染されない土地はなく、毒のない食べ物もない」と断言できる。しかし、なぜ賢いはずの中国人が母なる大地をこうして蹂躪してしまうのか。その原因は中華思想にある。

自分が世界の中心で、世界は自分のためにあるとするのが中華思想だから、征服と統治という概念だけがあり、調和と共存という譲り合いの精神が存在しない。

地球資源の有限性も汚染対策も、中国人の優先順位に入っていない。世界は自分のためにあると考える彼らは、いかに他人より先に資源を独占するかが最優先課題なのだ。今やその恐ろしい中華思想によって、地球上の人類すべてが崖っぷちに追い込まれている。

#### 進むも地獄、退くも地獄

その中華思想によって、実は中国人自身も追いつめられている。

中国の経済発展が続くのであれば、汚染はさらに加速する。経済発展が止まれば失業者があふれ、国をも揺るがす大暴動に発展しかねない。進むも地獄、退くも地獄なのだ。

金持ちになりたいという中国人の欲望は、誰にも止めることができない。経済が急速に発展した中国だが、配分は極めて歪んでおり、発展の果実を享受している金持ちは1%にも満たない。しかし、中国人は誰もが金持ちになろうとしていて、九九%の人間がその順番を待っているのだ。だが、果てしない欲望の果てに待っているのは死である。

今の中国でさえこれほど地球を傷めつけているのだから、今後、今に数倍する容赦ない略奪が加えられたなら、地球はいつたいどうなるのだろう。

#### 核汚染で住めなくなる中国

##### 震災で露呈した中国人の本性

3・11東日本大震災では、日本人の秩序ある行動が世界中から賞賛された。一方、この震災によって中国人の本性も露呈した。

震災直後、中国のネットには「快哉!」「慶祝! 日本沈没」「ざまみろ」「解放军を派遣して日本を占領しろ」などという書き込みが殺到した。これらのサイトはすぐさま中国政府によって閉鎖させられたが、中国人の一面を世界に周知させることになった。

これらの書き込みは、中国人の典型的な「幸災樂禍」(他人の災いを楽しむ)という心理を表している。

実は、今回の震災への反応で露呈されたのはこのような本性ばかりでなく、その死生観「食生怕死」(生に執着して死を恐れる)も明確に現れたのだ。

中国人は世界一不潔な民族だ。どんな汚い環境でも平気でいられる。中国のトイレを見ればそのレベルはすぐにわかる。「神州清潔の民」を誇る日本人なら、一秒たりともいられないところだ。もともと「汚い中国」で生きぬくためには、それぐらい凶太い神経が必要なのかもしれない。

ところが、神経が凶太いはずの在日中国人たちは震災直後、空港に殺到し、われ先にと日本から逃げようとしたことは未だ記憶に新しい。その数<sup>かず</sup>があまりにも多く、中国政府がチャーター便を調達して日本から帰国させたほどである。中には一〇年以上も日本に不法滞在している中国人もいた。なぜ中国人たちは逃げ出したのか。何を怖がっていたのだろう。恐がっていたのは、実は福島原発による放射能汚染だった。

東京・本郷にある中国人が経営する中華料理屋は震災が起こって間もなく、「野菜の仕入れが困難」という理由で、ほぼ二カ月近くも店を休んだ。中国人従業員が帰国して帰ってこなかったからだ。道路の向かいにある蕎麦屋が、震災の日はもちろん、その後も普通に店を開けていたのと好対照だった。

アメリカなども自国民を退避させていたが、在日中国人ほどヒステリックな反応ではなかった。放射能に敏感なはずの日本人以上に、中国人が放射能を怖がるのはなぜか? 中国人は毒だらけの環境に鍛えられていたはずではないのか?

ここに中国人の特質が現れている。それは、死に対する極端な恐怖心である。どんな人間でも死に対する恐怖心を持っている一方で、人はいずれ死ぬという諦念<sup>ていねん</sup>も併せ持つて生きている。

しかし、中国人にとって、それは他人に通用する常識であって、いざ自分に適用されると強烈な拒絶反応を起こす。汚れた水や食物は平気で口にしても、死に至るかもしれないという、目に見えない放射能となると話は別なのだ。

このヒステリックな反応は在日中国人だけではなかった。ヨードが放射線予防に効くという噂だけで、中国全土でヨード入り食塩の買い占め騒動が起こった。食塩買い占め騒動はまさに戦争さながらの光景で、瞬く間にどこの市場からも食塩が消えてしまった。

## 核実験で汚染されたシルクロード

皮肉なことに、中国人には知らされていないが、現在の中国の「核汚染」は世界のどの国よりも深刻な状況なのだ。中国の核汚染には四種類ある。核実験による汚染、核廃棄物による汚染、ウラン鉱山による汚染、原発事故による汚染である。

中国は、ウイグル人が暮らす地域で一九六四年から一九九六年にかけ、地表、空中、地下で延べ四六回もの核実験を行なったという。

長年、中国の核実験による汚染調査をしている高田純・札幌医大教授は「これらの核実験で、周辺住民一九万人が急性死亡し、放射線の影響を受けた面積は東京都の一三六倍に及び、一二九万人が甚大な放射線の影響を受けたものと試算される。中国共産党機密情報では七五万人死亡説もあるほどだ」と指摘している。

中国政府は未だにこの事実を隠し続けているが、一九九八年にイギリスのテレビ局チャンネル4が制作した「死のシルクロード (Death on the Silk Road)」というドキュメンタリー番組は、核汚染に苦しむウイグル人の実態を報道した。「死のシルクロード」はのちに世界八三カ国で放送され、翌年に著名な「ローリー・ペック賞」を受賞している。

番組の中に出てくるウイグル人は、放射能に汚染された空気を吸い、水を飲み、そしてガンになり、奇形児を産み、一生苦しむ。

ある村では、生まれてくる新生児の八割が口唇口蓋裂くしんくがいれつになり、別の村では、先天性異常による大脳未発達のため、歩けず話せない障害児ばかり生まれてくる。それでもウイグル人たちは、核汚染された土壌を耕して生きていかなければならないのだ。

涙なしでは見られない映像だった。現在も進行し続けているこの人為的な核汚染は、ウイグル民族を絶滅させかねない。この映像を見るだけでも、中国の残虐性を十分すぎるほど理解できるだろう。ネット上でも公開されている

一方、日本のNHKはシルクロードを美化する映像を何度も放送し、中国の核汚染隠蔽工作に加担している。そして、「死のシルクロード」を放送した八三カ国の中に日本はない。情けないとか言いようがない。

## チベット人も核汚染に苦しむ

中国ではウイグルばかりでなく、チベット人居住地も核汚染されている。

中国は一九六〇年代、青海省海北チベット自治州内に核兵器製造工場を作り、それは今も稼働しており、この工場から出た放射性廃棄物はココノール湖（中国名・青海湖）に流れ込んでいる。

その後、この地域で原因不明の死を遂げる人間や動物の数が増え続けており、魚もいなくなったということが、一九九二年九月一日にインドで開かれた「世界ウラン聴聞会」で発表された。

中国も隠しきれなくなったのか、一九九五年七月一九日付の新華社通信は、海北チベット族自治州のココノール湖の湖岸近くに「放射性汚染物質用のごみ捨て場がある」と伝え、放射性廃棄物の存在をあっさり認めたのだ。

チベット人を苦しめているのは、核兵器製造工場の放射性廃棄物だけではない。ウラン鉱山から垂れ流される有毒廃液もチベット人を苦しめている。

ウラン鉱山はチベットの複数の地域に存在し、甘肅省甘南チベット族自治州州のテオにあるウラン鉱山はその最大のものとして知られている。この鉱山から出た有毒な廃液は、住民が飲料水として利用している河川へ排出されていて、テオ地域の住民が放射線汚染によって健康被害を受けている報告が数多く出ている。

さらに、この影響は核汚染ウラン鉱山周辺にとどまらない。チベットは、南アジア、東南アジアのほとんどの地帯にとって主要な水源となっているため、この源流での放射能廃棄物は、下流の国々まで影響を及ぼしている。この憂慮すべき事態に対し、中国政府はまったく無関心なのだ。

### 二〇三〇年までに二〇二基の原子炉を新設

中国はそもそも、ウイグル人やチベット人を人間と見なしていない。だから平気で民族絶滅政策を実行し続けているのだ。まさしくこれは計画的な人種絶滅の「ジェノサイド」であり、国際法に

抵触する犯罪と言っても過言ではない。

しかし、いずれそのツケが中国にも回ってくる。それが原子力発電による核汚染だ。

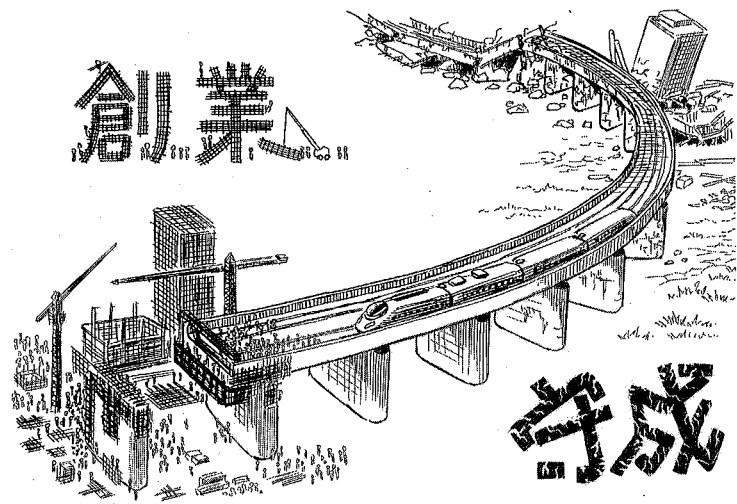
中国では経済成長にともない、エネルギー消費は今後も拡大するものとみられるが、現在、主流になっている石炭火力発電では環境が悪化する一方であり、原子力発電の比重を高めなければならなくなっている。

現在の中国の発電能力は約四億キロワットで、その構成は、石炭火力発電七七%、水力発電一六%、原子力発電二%、風力発電一%となっている。石炭燃焼による汚染を減らし、電力供給を増やすため、中国が二〇三〇年を目標に原子炉を一〇二基新設する国家方針を打ち出している。

中国の原子力発電が始まったのはかなり遅く、日本より三〇年以上も後の一九九〇年代からだ。しかも、中国の原発は炉型戦略に一貫性がなく、自主開発のものとはフランス製、ロシア製、カナダ製など、さまざまなタイプの原子炉を採用しているため、燃料、スペアパーツ、取り替え用機器の円滑な供給、保守員の訓練、安全規則への影響などが懸念されている。

中国当局は二〇二〇年までの原発増設計画に、東芝グループのウェスティングハウス製の最新鋭で安全性の高い原子炉（AP1000）を一部だけ採用し、大半は安全性の低い旧式原子炉（CPR1000）を導入している。

ちなみに、中国広東省にある大亜湾原発も旧式の原子炉で、二〇〇五年以降だけでも三回以上の



事故を起こしている。

原発のメンテナンスを中国人がしっかりとできるかどうか、という問題がある。

中国といえば「粗製濫造」という言葉が思い浮かぶが、その伝統工芸品の精緻さなどを見ても、あるいは近年問題になっている模造品の精巧さ（これも伝統文化?!）を見ても、彼らは必ずしも不器用な民族ではない。だが、それでもメンテナンスだけはきわめて苦手なのだ。

要するに、物を作るまではいいが、それを大切に維持していくというのが下手なのだ。

公共建設ではワイロ、水増し請求等々による利益が生じるため、中国人は熱心にそれに取り組み。そのプロジェクトが大きければ大きいほど莫大な利益が懐に入ってくるので、中国人は大好きだ。だから、原発を作るとなれば建設には真剣に取り

組む。しかし、それらが完成した後、メンテナンスとなると利益が少なくなるため、途端に興味を失う。なんとも「現金」な民族性なのだ。

原発事故も懸念される。二〇〇八年八月二八日、江蘇省連雲港市の田湾原発で爆発による火災が発生した。これを最初に報じたのは香港紙だったが、なんと事故から半月もたった九月一八日だった。中国本土ではいつさい報道されなかったものの、香港紙が報じたことで、翌一九日になって慌てて「軽微な火災があった」と報じた。ところが、それでも「爆発」によるとは報道しなかったのだ。

香港から五〇キロほど東方の広東省にある大亜湾原発は、二〇一〇年五月以降だけでも三件もの放射能漏れ事故が報告されている。しかし事故の公表は、いずれもマスコミ報道の後だった。

中国の原発は人材不足や巨額な贈収賄から生じた手抜き工事のため、事故発生のリスクは先進国より高いと予想されている。ところが、事故の報告は極端に少ない。これは言うまでもなく中国の隠蔽体質によるものだ。

### 核兵器より怖い中国の原発

中国の核兵器よりも、実は原発の方が危険だという見方もできる。たとえ独裁国家でも、核兵器となれば厳重に管理を行ない、その行使を決定するためにはいくつものプロセスがある。



だが、原発事故とそれによる核汚染は、人間のミスによりいつでも簡単に発生してしまう。中国ではいったん事故が起これば、被害はどんどん拡大していく可能性が極めて高い。

急ピッチで建設している中国の原発のほとんどは、臨海地域に集中している。そこは、ウイグルやチベットと違って、人口が密集しており、数億単位の人間が住んでいる。そこで原発事故が起これば想像を絶するほどの甚大な被害となろう。

これは日本にとっても他人事ではない。これから中国が増設しようとしている臨海地域の多くは、日本にとっては風上、海流の上流である。原発事故が起これば、放射能汚染物は黄砂のように偏西風に乗って日本に運ばれる。日本の水も汚染される可能性があるのだ。

だが、中国は利権のために原発を乱造し、日本に大きな脅威をもたらそうとしている。

## 地獄の中に天国はない

金も権力も併せ持つ富裕層

尖閣問題が顕在化してからは日本に来る中国人観光客が激減したが、それまでは日本で旅行や買い物を楽しむ中国人観光客の姿をよく目にした。銀座で抱えきれないほどの高級品を買い漁る彼らは、沈滞している日本経済の救世主であった。普通の人間なら一生に一度や二度しか買わないよう

な高価な宝石や腕時計を、スーパーのバーゲンセールのように一掃するほど買い漁る。

彼らはたまたま旅先で気前よく金を使っているのではなく、中国でも贅沢に暮らしている。北京のビジネス街には、道路の両側にフェラーリ、ロールス・ロイス、アストンマーティンなど、一台数千万円もする超高級車ばかりが並んでいる。

中国人富裕層の収入は、先進国の富裕層と比べても遜色はない。むしろ、贅沢という面だけなら先進国の大富豪以上だ。国民所得はまだ四千ドルで日本の十分の一ほどの国だから、富裕層と庶民の格差はいっそう際立っている。中国の一般庶民からすれば、まさに天国のような暮らしぶりである。

西側の富豪の多くは裕福な暮らしをする一方で、慈善事業にも熱心だ。それは一種のステイタスと言ってもよい。国の福祉だけでなく、民間にも貧者を救済する組織がたくさんある。所得格差は歴然としてあるが、持てる者が持たざる者へ手を差し伸べるルートは制度的に完備されている。

ところが、中国は実質的に資本主義社会に変身してしまったものの、共産主義の看板をゴミ箱に捨てたわけではない。

だから資本主義国と比べれば、国の持つ権限が大きく、企業に対する国の関与も深く強い。事業をスムーズに進めるため、企業家は権力者と結託しなければならない。結果として、事業の成功者は全員、権力者にコネを持つものか、権力者の家族になる。だから、金持ちは全員権力も持っている

ると考えるべきである。

このような構造だから、一握りの人間がますます財を成していく。そして、中国の富裕層は今の制度を守らなければいけないと考える。

中国人が豊かになれば、民主化も進むと考える政治学者は少なくないが、それはしよせんナイーブな夢物語だ。中国の富裕層にとって、金で権力を買い、権力が金を生む現在の社会主義市場経済は最高の制度と言えよう。しかし、これは十数億の人間の犠牲の上に、一握りの人間が裕福になるいびつな構造であることは言うまでもない。

### 富豪たちの恐怖感

手に入らないものはない富豪たちにとって、中国はまさに天国と言える。だが、富と権力の集中は、すなわち「リスクの集中」であることは歴史が証明している。権勢を極めた一族は必ず衰退する。これは不変の法則である。

だから権力者や富豪たちは、権力と富が増すごとに恐怖感を深める。権力と富を失う恐怖と、妬まれて攻撃される恐怖である。そのため、中国の富豪たちは例外なく自宅のまわりを要塞かと思ふばかりの高く厚い塀で取り囲み、そのうえボディガードを何人も雇っている。

日本の常識なら、自宅に巨額の現金を置くことは危険なことだが、中国の富豪たちは必ず巨額の

現金を手元に置いている。なぜかと言えば、銀行に入れると、いざというときに没収される恐れがあるし、すぐに逃げなければならぬときに現金が必要だからである。中国人富豪の恐怖感日本人の想像以上のものなのだ。

二〇一二年六月二九日付のアメリカ大手メディア「ブルームバーグ」に、習近平の自宅に三・四億米ドルの現金が置いてあると報道された。日本円に換算すれば二七〇億円だ。どのぐらいの札束になるかは想像もつかない。

しかし、習氏にはこれほどの現金が手元にないと安心できないのであろう。しかも、人民元ではなく、世界中どこでも通用する米ドルというのだから、いっそう興味深い。それは、いつでも国から逃げられるように準備していることを意味するからだ。国の指導者でさえも、中国では安心して暮らせないのだ。

一方、中国には、いまだに一日二ドル以下しか収入のない貧困層が日本の人口の二倍に相当する二・四億人もいる。そのうち、明日の糧さえも手に入れることができずに飢えている者は千万以上にのぼるといふ。

まさに「朱門酒肉臭、路有凍死骨」（富豪の家には食べきれず腐っていく酒と肉、路地には凍死者）の様相を呈しているのが今の中国だ。

では、このように他人の屍の上に成功した中国富豪は、果たしてその成功の果実を安心して享受

できているのだろうか？

天国に上ったり地獄に落ちたり

金持ちになるためには、権力と結託しなければいけない。金持ちになってからは、その結託はますます深まっていく。しかし、どの国でも権力に伴う闘争が付きものである。付いていく権力者が勝ち組で居続ける保証はどこにもない。権力者が転落してしまえば、企業家も道連れとなる。

薄熙來の失脚事件から、中国の権力闘争の凄まじさを垣間見ることが出来る。宮殿さえもしのぐような超豪邸に住み、行政、警察、司法を一手に握り、軍さえも動かせる薄熙來は、誰が見ても権力者だった。法律事務所を開業している妻の谷開來が行政に絡む案件でばろ儲けし、息子の薄瓜瓜はアメリカの名門大学で派手に遊んでいた。

その一族も、闘争で敗者に転じると犯罪者になる。権力闘争に負けて失脚した打撃は、彼と結託していた金持ちにまで及ぶ。どれほどの人数になるかはわからないが、少なくとも彼が打ち負かして財産まで没収した重慶の企業家たちと同数か、それ以上の人間になるだろう。それなら、数千人にのぼる数だ。その家族や関連する人間も入れると数万人になるだろう。薄熙來一人の権力闘争の勝ち負けによって、数万人もの人間が天国に上ったり地獄に落ちたりする。

専制政治や独裁政治も同様だが、中国のように権力が集中することで確かに物事の効率は良くない。

る。鶴の一声ですべてが動きだし、即断即決もできるからだ。

日本の企業家がそのような中国の権力者の力を見せられると、イチコロだ。彼らが中国の効率の良さを絶賛する心理もわかる。普通の人間は権力の前に卑屈になるからである。その権力も、行政だけでなく、生殺<sup>せいさつ</sup>まで決定できる司法権も一手に握る中国の権力者の前では、普通の人間なら誰もが萎縮する。

しかし、薄熙來事件が一つの不変の真理を教えてくれている。権力者は、高く上げれば上るほど、落ちるリスクも高くなり、落ちたらその傷も深いということだ。だから権力を牽制するため、効率のあまりよくない民主主義の制度ができ、いざとなれば司法や立法機関で権力を剥奪できるようになっているのだ。

広がる中国の「仇富現象」

持てる者に対して持たざる者が妬みを持つのは世界共通と言ってよいが、中国の「仇富現象」(富裕層に怨念を持つ現象)は次元が違う。

なぜなら、中国は先富論で経済を発展させてきたが、先に富めるとは、持たざる者からの略奪経済と言える。低賃金で働く労働者からの搾取だけでなく、経済発展に伴う土地開発は農民や貧しい住民からの土地の略奪によって成り立っている。その中から発生した巨大な利権は地方官僚と企業

家に分配されてきた。

直接的にせよ、間接的にせよ、中国の富裕層は例外なく貧困層からの略奪の図式で財を成している。権力との結託なしではありえない成功だから、持たざる者から敵視される。

彼らは一時的な略奪だけでなく、既得権者になった後も、不動産をつり上げ、物価を上昇させ、そこからさらに利益の獲得を拡大していく。そのぶん低所得者は相対的に可処分所得が減り、インフレの最終的な被害者になる。

低所得者の怨恨の深さは、富裕層とその家族に対する誘拐事件の多さでわかる。こうして中国の富裕層はブランド品を身にまとうて見せびらかす一方、犯罪の標的になることに怯えているのが現実だ。

一方、彼らの富が増えれば増えるほど、底辺の人民の生活は苦しくなる。所得格差の拡大によって、富豪たちの恐怖感も高まる。彼らにとって、中国は金稼ぎの場所ではあるが安住の地ではない。

富豪たちの不安は所得格差だけにとどまらない。もつと恐ろしいのは、構造的不安である。

もともと、権力と結託した金儲けなので、権力者との縁を切ることはできない。権力者の飽くなき要求に応じなければ、富豪たちも簡単に犯罪者に仕立て上げられてしまう。

たとえば、浙江省出身の女性企業家の呉英は違法な資金集めをしたとして逮捕され、財産を没収された。それだけでなく、死刑にされてしまった。違法な資金集め程度の犯罪でなぜ死刑にならな

ければいけないのかと言えば、背後にいる汚職官僚たちによる「口封じ」のためだった。同じような手法は薄熙来も使っており、多数の企業家を死刑にし、没収した財産の一部を懐に入れたと言われている。

こうして富豪たちは、権力との結託によって財を成すも、権力によって犠牲にされるのではないかという「構造的不安」に怯えているのが実態だ。これは天国ではない。不安にさいなまれ、恐怖に怯え続ける地獄と言つてよい。

中国の勃興についてはさまざまな見方がある。中国を世界経済の救世主のように持ち上げる見方もあれば、そのいびつな構造に潜む不可測要素を危惧する見方もある。

しかし、成功者とされる中国の富豪たちが抱く恐怖心を見ていると、少なくとも一つの事実がわかる。それは、地獄の中に天国はあり得ないということだ。

## 海外に逃げる中国の高官たち

成功者ほど外国へ移住したがらる

地球村と言われる現在、さまざまな理由で異国へ移住する人が増えている。言葉も生活習慣も違う異邦の地で生きることが、並大抵のことではない。異国での生活は、慣れるまでの苦勞はもちろ

ん、一生かかっても越えられないハードルも多くある。異文化の下で生活するとはそういうものだ。だから、自国で成功している者は、よほどの理由がない限り母国を去ることはない。成功の土台をあえて捨て、他国でゼロからスタートすることは理屈に合わないからだ。

しかし、中国では成功者ほど外国へ移住したがる。こうした心理は、おそらく日本人には理解しにくいかもしれない。

中国社会で成功とされる基準は、先にも述べたように、「名利双収」（名声も利益も手に入れる）と言われる。お金も名声も両方手に入れなければ、成功とは言えない。だから、中国で成功とされるモデルは、高官と高官をバックにして大儲けする企業家となる。

特に高官は、学問も名声も権力もお金も一身にあるから、最上位の人間とされている。「論語」に「学而優則仕」（学問が優れば官位につく）という言葉がある。学問は官位への登竜門という中国的打算が行間に滲み出ている。

『論語』の通りなら、中国の高官は学問も優れているはずだが、庶民の間には「官大学問大」（官位が高いほど学問で威張る）という、高官の学問を揶揄する言葉もある。虚偽に満ちた『論語』よりも、庶民の言葉がよほど真実を反映している。

学問はともかく、中国人はいったん官位につくと、「升官発財」（昇進して金儲けする）に突っ走る。権力を手に入れてお金を儲けることは「名利双収」への最短距離だからだ。これが中国の成功

モデルなのだ。

一般庶民から見れば、中国の高官はまさに極楽トンボのような存在である。「刑不上大夫」（権力者には罪が及ばない）という孔子の教えの通り、中国の権力者には法律も通用しない。これなら、高官は威張るだけでなく金儲けもでき、やりたい放題で、誰からも文句を言われない。

実際、中国では中央政府から地方の小さな村に至るまで、高官たちはワイロの授受だけでなく、人身売買から麻薬の密輸にまで手を染めている。高官たちにとって、中国はまさに天国なのだ。

### 海外へ逃げ出す「升官発財」の中国高官

しかし、中国の高官たちはこの「天国」を見捨て、大量に海外に逃げ出している。九〇年代以降、判明しているだけでも、海外逃亡した政府高官は二万人以上にのぼり、不正に持ち出したお金は一〇兆円を超えているという。それも、一人あたり平均一三億円の公金あるいは不正蓄財を海外に持ち逃げしているというから驚く。元温州市副市長の楊秀珠なる高官は、判明しただけでも三兆四三五〇億円も汚職で手に入れ、海外逃亡したと伝えられる。

そこで、中国共産党は二〇一〇年一月、中央規律委員会監察部、公安部、司法部、外交部合同で「汚職公務員による海外逃亡防止会議」を作って、高官の海外逃亡に対する防止策を練っている。世界広しといえども、高官の海外逃亡を防ぐ組織は中国以外にない。こんな恥さらしの組織を作ら



なければならぬほど、中国では高官の海外逃亡問題が深刻なのだ。

高官たちの手口は共通している。不正蓄財↓子女を海外留学させる↓資産を海外に移転↓家族を海外に移住↓本人が海外逃亡↓渡航先国の法を盾に帰国拒否、という手順である。

だから高官子女の留学は、海外逃亡へのワンストップであり、安全弁の一つなのだ。ちなみに、中国の最高決定機関である中央政治局の常務委員九人のうち、子や孫を米国に留学させている者は、少なくとも五人いる。習近平の娘も、ハーバード大に留学中である。

普通の国なら、これはゆゆしき問題だ。なぜなら、国の指導者たちの子供や孫が他国に入質をとられているようなものだからである。しかし、中国の指導者たちにとって、国のことよりも逃亡先

の確保の方が大切なのである。

さらに、二〇一二年三月までの統計によれば、中国共産党の最高指導機関である「中国共産党中央委員会」第一七期の委員二〇四人のうち、約九二%にあたる一八七人の直系親族が欧米の国籍を取得している。このほか、中央委員の補欠委員は一六七人のうち二四二人(八五%)、中央紀律検査委員会ではメンバー一二七人のうち一三人(八九%)の親族が海外に移住している。

米政府の統計によると、中国の省部級高官の子女のうち七五%が米国の永住権あるいは米国籍を所有しており、孫の代になるとその九一%が米国籍を持つていたとされる。

以上の事実でもわかるように、中国の指導者たちの本音は自国から逃げ出したいのである。

中央銀行が手引きするマネーロンダリング

高官たちが持ち出した資金はワイロだけでなく、金融機関からの借入金、国家建設プロジェクト資金などから横領した公的資金も少なくない。

彼らは地下銀行を利用したり、海外の特定関係者を通じるか、ケイマン諸島などのタックスヘイブンにペーパーカンパニーを設立し、中国から資産を移転してマネーロンダリングをする。実は、中国中央銀行のウェブサイトに「腐敗分子による海外資産転移の手口」でその手口を詳しく紹介している。中国の高官たちがそのウェブサイトをしながら、熱心にマネーロンダリングを勉強する姿が

目に浮かぶ。

高官たちの逃亡先はアメリカ、カナダ、オーストラリア、東南アジアに集中している。地位が低い高官は東南アジアで、地位が高い高官はアメリカ、カナダ、オーストラリア、オランダなど欧米の先進国へ逃亡する。

なぜ逃亡先までランクがあるかというと、地位の高い人は当然ながら不法所得も多く、生活費の高い先進国でも楽に暮らせるからだ。また不法所得の多い分、死刑になる可能性も高くなるが、司法が独立した先進国なら、人権を盾にすれば逃亡先から強制送還されることはまずない。彼らは悠々とアメリカなどの先進国で余生を送れるのだ。不法所得の少ない高官なら、生活費の安い東南アジアで甘んじるしかないというわけだ。

#### 高官たちが逃げ出す理由

それにしても、なぜ成功者であるはずの高官たちは母国から逃げなければならないのだろうか？その最大の理由は、中国は法治国家ではなく人治国家だからである。

世界でも指折りの法治国家に住む日本人には想像しがたいことかもしれないが、法治国家なら、権力闘争に負けたくらいで牢屋に入ることはない。だが、人治国家である中国の場合は、権力闘争に負けることは致命的で、命を取られるか、投獄されるかのどちらかしか道はない。

そもそも中国の法律とは、搾取や権力闘争に使う道具でしかない。だから、権力闘争に負けると、一族郎党まで牢屋に入れられてしまう。これも中国特有の「誅九族」（親族は皆殺し）という報復文化の特徴だ。

勝者はどうなるかというと、高位高官にのぼるほど権力も強くなるが、彼らに打ち負かされた敵も多くなる。ある意味で、高位になればなるほど危険なのだ。毛沢東に負けた林彪と劉少奇の悲惨な末路はそのいい例だ。

二〇一二年三月に失脚した薄熙来もその典型的な例と言える。まるで映画のような失脚事件だったが、中国ではこのような熾烈な権力闘争は決して珍しいものではない。高官のポストは、並みの神経の持ち主ではまず務まらない。邪魔者を消すくらいは平気でやりかねない。だから、彼らは権力の座についたその日から、明日は我が身と海外逃亡の準備もしなければならぬのだ。

#### 毒だらけの中国には住みたくない

中国では、毒のない食べ物はなく、汚染されていない飲み水もない。大都市なら空気がどんよりしており、専門家でなくても空気汚染の酷さがわかる。そのため、先に述べたように、中国には高官専用の農場があり、高官専用の大型空気清浄器まで生活必需品となっている。飲料水も海外からの輸入である。

しかし、これらの防衛策には限界がある。中国の状況は日に日に悪化していることを、誰よりも知っているのが高官たちだ。とどまることのない土壤汚染、水質汚染、空気汚染、それ以外に、いずれ全面的に拡大する核汚染の恐怖もある。

高官たちが中国から逃げる主な理由は二つ、権力闘争に対する恐怖心と、忍び寄る核汚染を含む毒だらけの環境に対する恐怖心だ。前者は高官特有のものだが、後者なら庶民も同じで、庶民も中国から逃げ出そうとしている。しかし、逃げ出すお金がなかった。

それ以外にも、多発する犯罪、歪む教育制度等々、中国人が国から逃げ出したい理由は山ほどある。富裕層の六割が海外へ移住したいとの統計調査もあるほどだ。しかし、これはかなり控えめな数字だろう。本音はほぼ全員ではなからうか。

日本が、中国人には無条件で日本国籍を与えると発表したら、中国人の大半が喜んで日本人になるだろう。嘘だと思ふなら、法務省民事局の統計を見ていただきたい。

この一〇年間、常に韓国・朝鮮からの帰化が一番多く、次が中国となっている。平成二三年の場合、一万三五九人が帰化し、韓国・朝鮮は五六五六人（五四・六％）、次の中国は三二五九人（三一・五％）となっている。

韓国も北朝鮮も中国も、あれほど日本を嫌っていたはずなのにと思うかもしれないが、これが現実であり、「反日」など大した問題ではないのだ。

## 4 中国ガンは退治できる

### これ以上待てない中国ガン対策

#### 崩壊と再生を繰り返す中国ガン

正常な細胞を食いつぶし、最終的にはすべてを破壊して、自分自身も滅亡することになるガン細胞は、あたかも永遠に生き続けることを前提としているかのように、すべての秩序を無視し、すべての栄養分を奪い取るうとする。まるで自分さえ生きていければいいといわんばかりに、無限増殖しようとするのだ。

中国には数千年の歴史があるといわれる。文献上はつきりと記録されている歴史だけでも、三千